

松山市文化財調査報告書16

斎院  
茶白山古墳

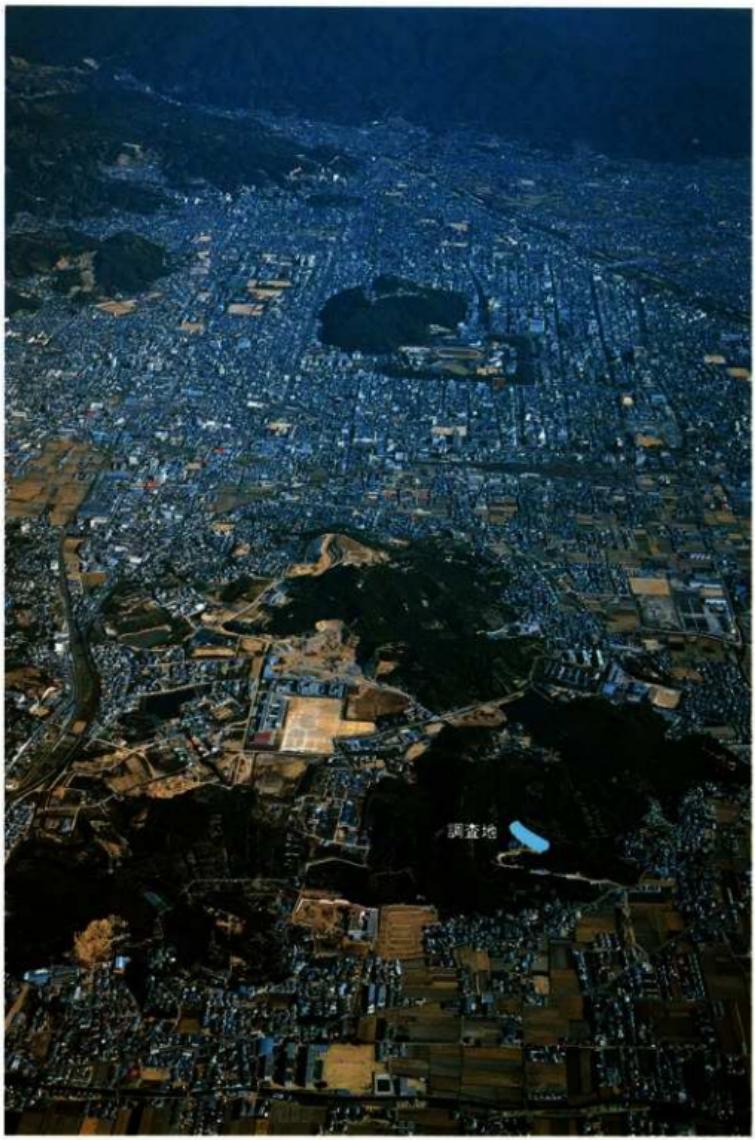
1983

松山市教育委員会

齊院  
茶白山古墳

1983

松山市教育委員会



調査地遠景写真

## ——序——

このたび、松山市民の生活に欠くことのできない水を、安定して各家庭にお届けできるように……と、上水道第3次拡張計画の最後を飾る津川配水池の建設工事を実施するのに先立って、松山市公営企業局から、計画地が岩子山古墳群内に位置しているため、埋蔵文化財の所在確認を行って欲しい旨依頼があり、踏査を行ったところ古墳の所在が確認されたので、事前発掘調査を実施し記録保存することとした。

埋蔵文化財に対する認識が全国的に深まりつつある現在、この種の調査について埋蔵文化財がもつその意味と意義について開発関係者各位の一層の御理解をお願いしたい。

本報告書は、昭和57年2月1日～同年3月31日の間に発掘調査したものであるが、この報告書により、埋蔵文化財の調査、研究の一助になるところがあれば幸いである。

最後に、本調査に当たり、終始御協力をいただいた松山市公営企業局ならびに、調査に御協力いただきました多くの方々に対し厚く御礼を申し上げます。

昭和58年5月31日

松山市教育委員会

教育長 西原多喜男

## 例 言

1. 本書は松山市教育委員会が1982年2月から同年3月にかけて実施した齊院・茶臼山古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は松山市公営企業局より松山市教育委員会が委託されて実施した。
3. 調査費用及び報告書印刷費は松山市公営企業局が負担した。
4. 調査年月日 昭和57年2月1日～同年3月31日  
発掘調査地 松山市北齊院町乙91番地（東経132°44' 北緯33°50'10''）

### 5. 調査組織

#### 松山市教育委員会

教育長	西原多喜男	調査担当	西尾 幸則（文化第二係主任）
教育次長	森田富士弥	調査指導	池田 学（文化第二係指導員）
"	三神 貢	調査主任	松村 淳（文化第二係指導員）
文化教育課長	藤原 渉	調査員	栗田 茂敏（文化第二係調査員）
" 補佐	坪内 晃幸		
文化第二係長	大西 輝昭		

### 6. 本書作成にあたっての業務

遺物整理・実測・製図・口誌	松村 淳
鉄器保存化学処理・実測・データ	池田 学
写真及びレイアウト	西尾 幸則、池田 学
執筆・編集	西尾 幸則

### 7. 発掘調査にあたって埋蔵文化財に対しご理解いただき、終始ご協力いただいた公営企業局建設課長加藤 孝氏及び担当課員の皆さんに感謝申し上げます。

### 8. 調査協力に感謝申し上げます。

資料提供者 相田 則美（県史編纂室）

# 目 次

## I 遺跡の環境

遺跡の位置と歴史的環境.....	1
------------------	---

## II 発掘調査の経過

1. 調査経過.....	3
2. 調査日誌.....	4

## III 遺 構

調査地の地形.....	8
a. 墳丘及び外部構造.....	9
b. 内部構造.....	9
c. 土壌 (SK-1) .....	9

## IV 遺 物

1) 須恵器.....	14
2) 墳輪.....	16

## V まとめと若干の考察.....22

## 図版目次

- 図版 1 調査地全景（北から）  
　　調査地全景
- 図版 2 調査地下刈り状況  
　　調査前状況
- 図版 3 調査地全景（北から）  
　　遺構全景（東北から）
- 図版 4 石室検出状況(1)  
　　遺物出土状況(1)　　遺物出土状況(2)
- 図版 5 遺物出土状況(3)  
　　遺物出土状況(4)　　遺物出土状況(5)
- 図版 6 石室検出状況(2)
- 図版 7 石室全景
- 図版 8 石室床面（玉石状況）  
　　版築確認
- 図版 9 溝（SD-1）全景  
　　埴輪原位置の検出　　埴輪出土
- 図版 10 溝部埴輪出土状況(1)  
　　出土状況(2)　　出土状況(3)
- 図版 11 溝（SD-1）埴輪出土状況(4)  
　　埴輪出土状況(5)　　埴輪出土状況(6)
- 図版 12 須恵器出土状況(1)石室西側  
　　須恵器出土状況(2)
- 図版 13 出土遺物（須恵器）
- 図版 14 出土遺物
- 図版 15 出土遺物（朝顔形埴輪）
- 図版 16 出土遺物（朝顔形埴輪）
- 図版 17 出土遺物（円筒埴輪）
- 図版 18 出土遺物（円筒埴輪）
- 図版 19 出土遺物（玉類）  
　　出土遺物（鉄器類）

## 挿図目次

第1図 遺跡の分布図	1
第2図 岩子山丘陵を望む	2
第3図 介天山古墳群を望む	2
第4図 調査地より西方を望む	3
第5図 下刈り及び調査準備	4
第6図 トレンチ設定(1)	4
第7図 トレンチ設定(2)	5
第8図 調査状況	5
第9図 調査状況	6
第10図 溝内遺物測量	6
第11図 出上状況	7
第12図 増輪出土状況	7
第13図 調査地地形図	8
第14図 石室検出状況	9
第15図 石室床面（貼床確認）	9
第16図 出土須恵器実測図（石室西面）	10
第17図 SK-1 実測図	10
第18図 溝（SD-1）増輪出土状況	11
第19図 石室内遺物出土状況	12
第20図 石室平断面図	13
第21図 須恵器実測図（土師器19・20、瓦器21～23）	15
第22図 増輪実測図	17
第23図 玉類実測図	21
第24図 鉄器類実測図	21

## I 遺跡の環境

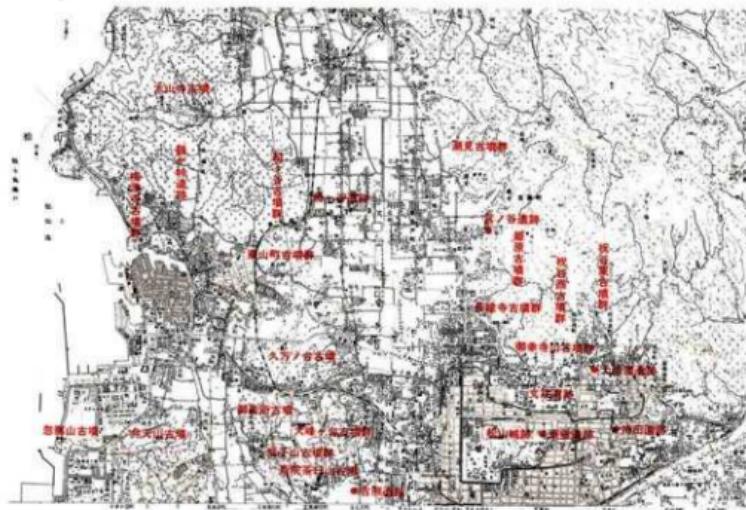
遺跡の位置と歴史的環境

松山平野西面の海岸線に沿って太山寺絆ヶ森、東山、久万ノ台、大峰ヶ台丘陵がそれぞれ立地し、その中の大峰ヶ台丘陵西端に岩子山古墳群が存在し、その西麓が本調査地になっている。

このように岩子山及び大峰ヶ台独立丘陵はやや海岸線に近いが平野部との中間位置の丘陵であり、岩子山調査地からは東方の松山平野が一望できると同時に西方の海岸線も望まれる。

次にこの周辺地における調査は、本調査地より西1kmに弁天山丘陵が望まれて独立する弁天山古墳群が存在し、5世紀～6世紀代の石棺や石室が10数基知られる外、同丘陵東麓緩斜面の津田鳥越遺跡（S52.1月松山市教委調査）からは弥生後期住居址群を検出し、それより壺、甕、鉢形土器、支脚等のセットや多量の石錘、土錘などの魚具類の出土も見られている。

統いて調査地から北1.4kmに位置する久万ノ台丘陵では昭和48年11月に松山西高等学校建設に伴って松山市教委により同丘陵古墳群の一部を調査し、後期横穴式石室等の検出を見て



第1図 遺跡の分布図

いる。

次に、弥生期から古墳期の宝庫として知られる大峰ヶ台では東頂上近くで弥生中期の祭祀造構の検出が見られている外、大峰ヶ台北面に位置する御座所古墳（S48、4月同市教委調査）からは全壇寸前であったが横穴式石室1基を検出し、これより各須恵器と若干の装身具類の出土を見ている。

また、大峰ヶ台丘陵南麓300mからは農耕用一大土木造構として知られる古照遺跡が見られ、昭和48年7月に本格調査（同市教委調査本部）が実施され、これまで第4次の調査がなされている。

その他、本調査地丘陵東上部に位置する岩子山古墳群では昭和30

年に名本二六雄氏らによって後期古墳から人物、馬形等の各形象埴輪の出土が知られている。このように調査地周辺にはこれまで著名な遺跡が見られており、その中で岩子山古墳群（10数基）における被葬者が織り広げられたであろう生活舞台の中心はおそらく岩子山麓及び西面、南面の古照遺跡を含む周辺の平野部として考えられるもので今後の追求が必要である。



第2図 岩子山丘陵を望む



第3図 卍天山古墳群を望む

## II 発掘調査の経過

### 1. 調査経過

昭和56年12月1日松山市公営企業局から松山市津田配水池建設について埋蔵文化財確認調査申請が同市教委に提出された。同申請地は同市作成文化財地図の（No.31）岩古山古墳群になり、周知遺跡として登載されている場所でもあり同年12月16

日に現地踏査した結果、

円墳1基が確認され本格調査することになった。また本調査に先がけて同申請地など周辺等の考古遺物の出土や字名等を調査した結果、調査地南麓より須恵器片の出土や古墳期の土偶の出土をみていることや岩子山古墳群調査報告書等について調査員間で検討を行い、茶臼山の字名が残っていることにより本遺跡名を齊院茶臼山古墳とした。

本格調査は昭和57年2月1日より同年3月31日の間実施することとなった。

調査はまず、同地が柑橘類の耕作地であることからこれらを伐採し、先に確認された墳丘部の測量を実施し、調査対象面積約3,000m<sup>2</sup>にトレチを設定した。1号墳については墳丘中心部から4等分の割付を行い主軸を検討しながら遺構検出を順次実施した。

この結果、1号石室は全壊寸前の状態であったが石室内より鉄器及び若干の須恵器片、玉類等が出土し、同墳丘からも同石室副葬品の出土（蓋杯、匙）が見られた外、同石室北側に周溝が検出され、これより円筒埴輪、朝顔形埴輪などの出土も見られた。

以下、日を追って調査経過を略記する。



第4図 調査地より西方を望む

## 2. 調査日誌

2月1日晴 調査地中央を東西に通る農道を境に、北側をB、南側をA区とし、雑木、柑橘類を伐採下刈りをする。(グリッド設定は既設の市企業局の測量杭を転用)

2月2日晴 下刈り後写真撮影し、A区に南北の試掘トレンチ(A.T. 1)を入れる。

北より8m地点に周溝を検出、埴輪片出土1号周溝とする。周溝から南側部に版築が認められる。

2月3日晴 トレンチ掘り終了、周溝部(NE 1-1)を全面掘り下げる。埴輪片多量に出土。

2月4日雨 作業休み。

2月5日晴 周溝内出土遺物埴輪片実測。現場事務所設置。発掘諸機材を搬入。BM(55.00m)をA区東端に設ける。

2月6日晴 B区(SE 1-2, SW 1-2)に、東西の試掘トレンチ(B.T. 2)を入れる。

2月7日 日曜作業休み。

2月8日晴 周溝掘り下げ。AT-1断面層序計測。B区(NE 1-1, SE 1-1, SE 1-2)に南北の試掘トレンチを入れる。

2月9日晴 ベルコン搬入。AT-1断面及び周溝出土遺物等写真撮影、周溝掘り下げ。

2月10日晴 周溝掘り下げ、埴輪片、土師皿片、須恵器片出土。

2月11日 祝日作業休み。

2月12日晴後曇 周溝内出土遺物を実測し取り上げる。A区SW 1-2, B区SW 1-2掘り下げる。

2月13日晴 昨日に続く作業を行う。



第5図 下刈り及び調査準備



第6図 トレンチ設定(1)

2月14日 日曜作業休み。  
2月15日晴 周溝内出土遺物実測し取り上げ。A区NE2-1, 1-1, SE1-1のベルト断面計測。A区西端の堆土を移動する。

2月16日曇 A区NE1-1掘り下げ、特に周溝肩部岩盤のため注意する。

2月17日雨 室内にて遺物整理をする。

2月18日晴後曇 A区SE1-2, SW1-2(南岸部)掘り下げ。

2月19日雨 室内にて土器水洗いをする。

2月20日小雨 A区堆土をB区へ移動、正午前降雨、作業を中止し室内作業をする。

2月21日 日曜作業休み。

2月22日晴 A区NE1-1, NE2-1掘り下げ。

2月23日晴 昨日に続く作業及び、A区NW1-1の周溝コーナー検出作業をする。

2月24日雨 室内にて遺物整理をする。

2月25日晴 A区NW1-1掘り下げ、出土遺物埴輪片等実測し取り上げる。

2月26日晴 周溝完掘。A区NE1-1周溝の北部に土壤を検出する。

2月27日晴 A区NE2-1, SE2-1に、石室に用いられたと思われる石を検出する。NW1-1掘り下げ。

2月28日 日曜作業休み。

3月1日曇 A区NE2-1, SE2-1の石室検出作業。

3月2日晴 石室を確認し2号墳とす  
る。実測のための割りつけ  
をする。2号石室の西方向  
3m(A区SW1-2)地  
点に、二次的埋葬と思われ  
るV字形に並んだ須恵器の  
完形品、杯蓋、杯身、匙等  
計11点出土、実測し取り上  
げる。

3月3日晴 2号石室掘り下げ、かな  
りの破壊度がめだつ。玄室



第7図 トレンチ設定(2)



第8図 調査状況



第9図 調査状況

内部より管玉、丸玉、刀子片等出土。須恵完形品出土地に遺構は認められない。出土遺物測点各ポイントの測量をする。

3月4日晴後曇 2号玄室部掘り下げ、須恵、土師、鐵錫等の各片出土。地山掘り込み面の検出作業も行う。出土遺物実測、落ち込み石実測。

- 3月5日雨 作業休み。
- 3月6日晴 2号出土遺物鐵錫類実測、及び地山掘り込み面の検出作業。
- 3月7日晴 日曜作業実行、2号石室平面測量及び排土盛上を移動する。
- 3月8日晴 2号玄室掘り下げ、地山掘り込み面の検出。
- 3月9日晴 2号玄室掘り下げ、鐵錫類出土実測し取り上げ。A区NE1-1, NW1-1の畦断面層序計測し排除する。
- 3月10日晴 2号玄室水晶玉、ガラス小玉、鏡、馬具、鐵錫等出土、実測し取り上げ、閉塞口の探求を行う。
- 3月11日晴 A区SW1-1掘り下げ。
- 3月12日曇後雨 2号玉石部実測、A区SW1-1, NW1-1掘り下げをする。正午より降雨作業中止し室内にて遺物整理をする。
- 3月13日曇後晴 1号周溝出土遺物埴輪片を実測し取り上げ、周溝についての作業を終わる。保護シートの雨水を排水し玉石部の実測をする。B区NE, SE1-1掘り下げ。
- 3月14日 日曜作業休み。
- 3月15日雨 作業休み。
- 3月16日晴 2号玉石部実測、玉石中より水晶玉、管玉出土、実測取り上げる。
- 3月17日曇 玉石除去作業（水晶玉、管玉、丸玉、鐵錫片出土）、A区NE1-2の土壤掘り下げ、B区SW1-1掘り下げ、BT-1断面計測。
- 3月18日晴後曇 2号玄室出土遺物実測



第10図 溝内遺物測量

測し取り上げ、土壤掘り下げ獸骨の一部検出、BT-1の排除。

3月19日晴 A区の全域を清掃し全景及び、その他の写真撮影をする。BT-2断面計測し排除する。

3月20日晴 2号玉石除去、A区N.E. 1-2の土壤平面及び、断面測量をする。B区N.E., S.E. 2-1掘り下げ。

3月21日小雨後晴 日曜作業実行、2号床面精査し十字に試掘トレンチを入れる。床面は粘土による貼床が認められる。

3月22日晴 2号石横み展開図作成、玉石断面計測。

3月23日晴 A区平面測量、B区S.E. 1-1, 2-1, SW 1-1精査。

3月24日晴 A区平面測量、その他昨日に継ぐ作業をする。

3月25日晴 A区コンタ測量、B区全域精査完了。

3月26日晴 A区コンタ測量終わり、  
B区平面測量及び、コンタ  
測量をする。発掘諸機材整  
理し一部搬出する。

3月27日 作業休み。

3月28日 日曜作業休み。

3月29日晴 B区コンタ測量を終わり、  
2号床面試掘トレンチ断面  
層序計測。諸機材搬出し全  
ての日程を終了する。



第11図 出土状況

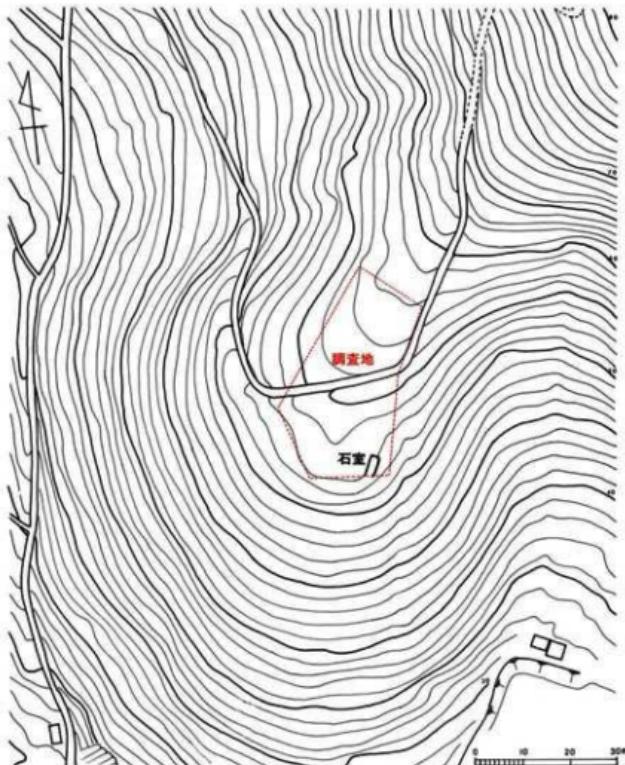


第12図 墓輪出土状況

### III 遺 構

#### 調査地の地形

調査地（海拔52m～60m）は岩子山南西部中段のゆるやかな尾根に属し、本調査地より北面は急斜面の絶壁をなし、上に岩子山頂上（海拔114m）が望まれ花崗岩の露出が見られる。また、南面と西面は調査地より比較的急斜面に下がり柑橘類の栽培がなされている。なお、これに続く南面山麓部には良好な緩斜面が見られ、直径30mをこえる円墳が考えられる外、弥生土器片及び須恵器片等も認められている。



第13図 調査地地形図

### a. 墳丘及び外部構造

尾根中段緩斜面に築造されたものであり、前述の要因により盛土はかなり2次的に削平され緩斜面をなし、僅かに墳丘として観察できるもので同墳丘は最大長15mが計測できるが墳丘形態は不明である。



第14図 石室検出状況

### b. 内部構造

検出を見た主体部は、開墾等により全壊寸前の状態であり基底石数個と奥壁の一部を残すものであった。

石室主軸はN14°40'20"Eにとり、南南西に開口方位をなすもので残存し、検出された基底石により、石室規模は奥壁近くの床面で幅2mが計測でき長さは不明であるが石室築造時の掘方検出面から4.5m前後のほぼ長方形プランが推定でき、基底石や床面状態を考え合せば横穴式石室をなすことが考えられる。

石積み及び石材使用法は、奥壁中央部に大きい石を縱に据えこれを中心に奥壁両側に割石を主体に横積みされ、目詰めに小口の割石及び粘土使用が認められる。また、両側壁は基底石数個と一部分の石積みからすれば、割石を主体とした横積みとして考えられる。また、床

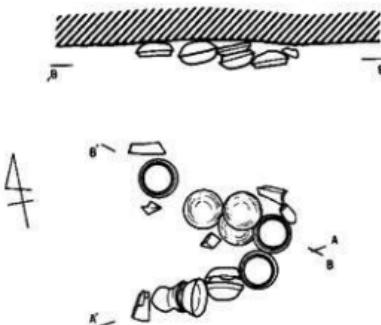
面施設は尾根斜面地に構築することを考慮し石室築造前に茶褐色土による貼床をめぐらしその上にさらに3cm~6cm大の川原石を敷くものであった。



第15図 石室床面（貼床確認）

### C. 土壌 (SK-1)

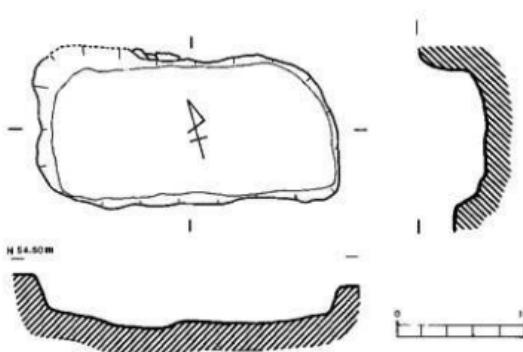
本遺構は溝 (SD-1) 北方から検出されたもので花崗岩の地山に切り込んでおり、そのプランは



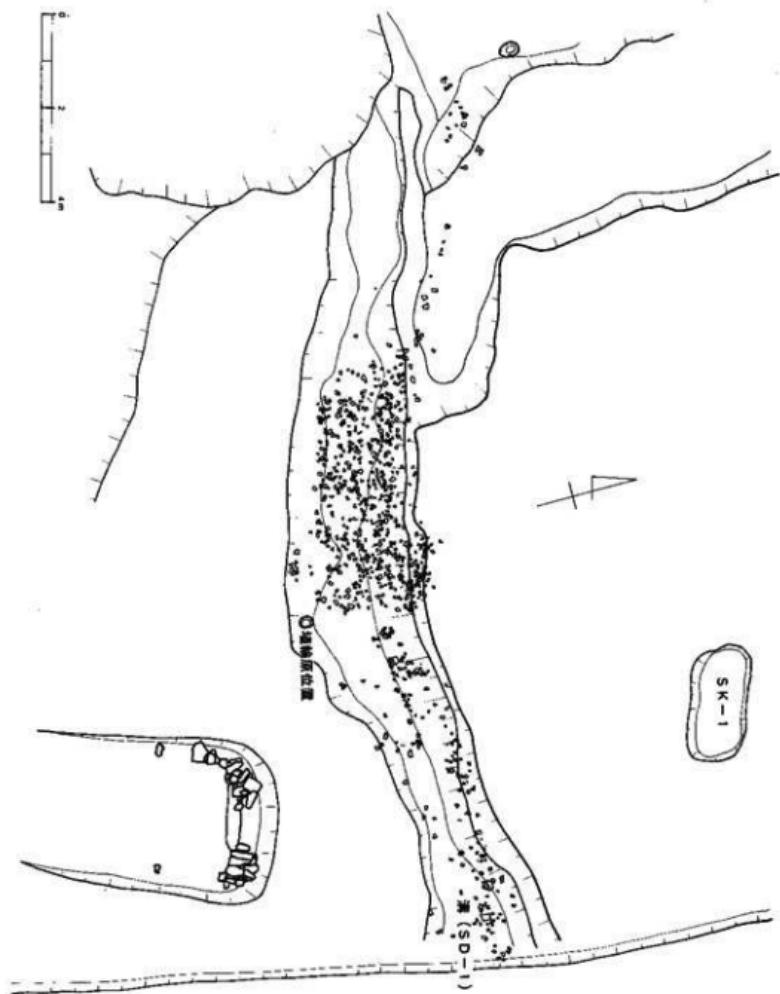
第16図 出土須恵器実測図（石室西面）

長方形状で、幅110cm、長さ235cm、深さ30cm、黒みをおびた茶褐色土中から獸骨片のみが検出されている。

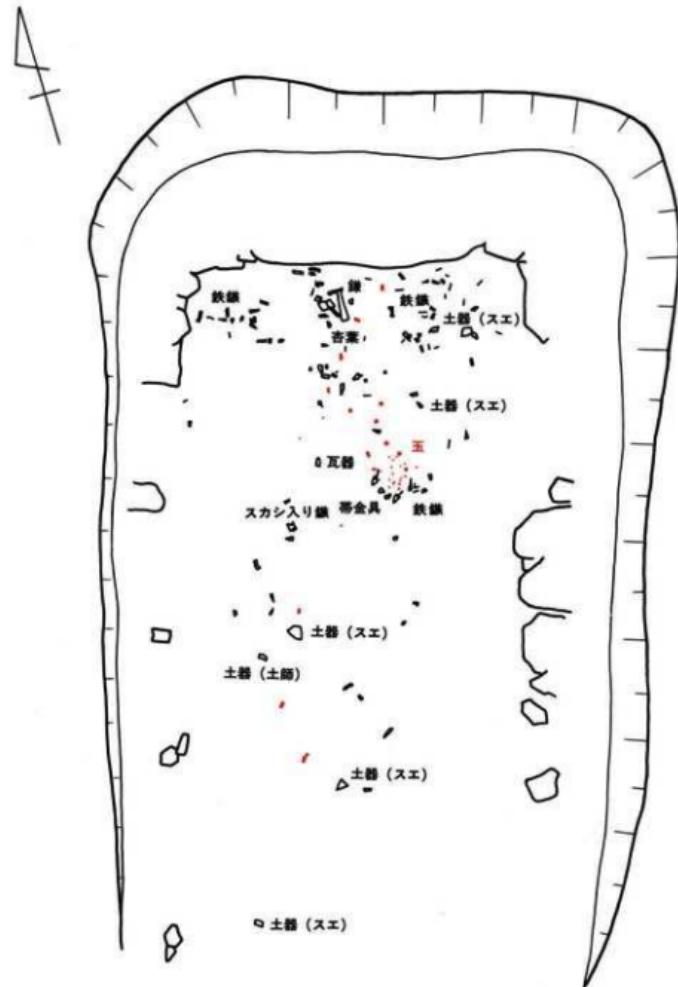
また、本遺構については全体的に擾乱土の混入がみられ、どういった性格を持つ遺構であるかは判然としない。



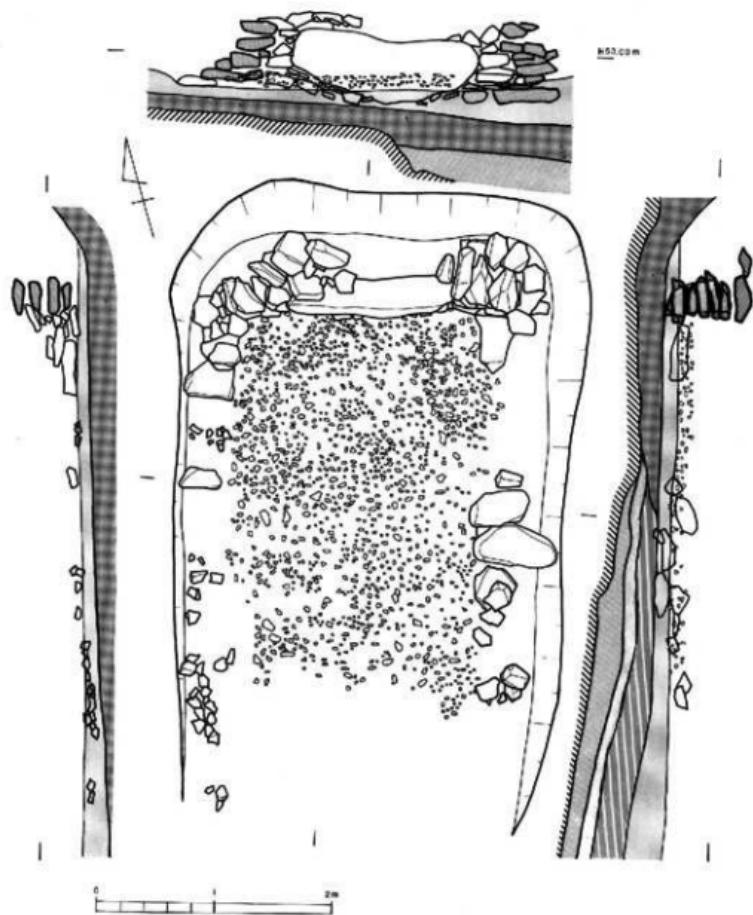
第17図 SK-1 実測図



第18図 溝（SD-1）埴輪出土状況



第19図 石室内遺物出土状況



第20図 石室 平断面図

## IV 遺 物

(本調査出土の詳細なデータは出土遺物観察表に表示した。)

本調査古墳は前述した様に開墾等の二次的行為も見られ全壊寸前の状態であったが石室内からは須恵器数点・土師壙1点と管玉9個・算盤玉(水晶製)18個・丸玉(ガラス製)23個・小玉(ガラス製)2個の各玉類と錐1点・辻金具4点・鉈1点・轡1組・帯金具4点・鉄鎌30点の各鉄器類がそれぞれ出土し、外に別個に考えるものとして碗(平安期・瓦器)3点の出土も見られている。またこの外に石室北側に検出された溝(SD-1)からは多量の埴輪片(円筒・朝顔形)の集中的な出土が見られ、また器台数点・大型甕の出土も合わせて見られている。

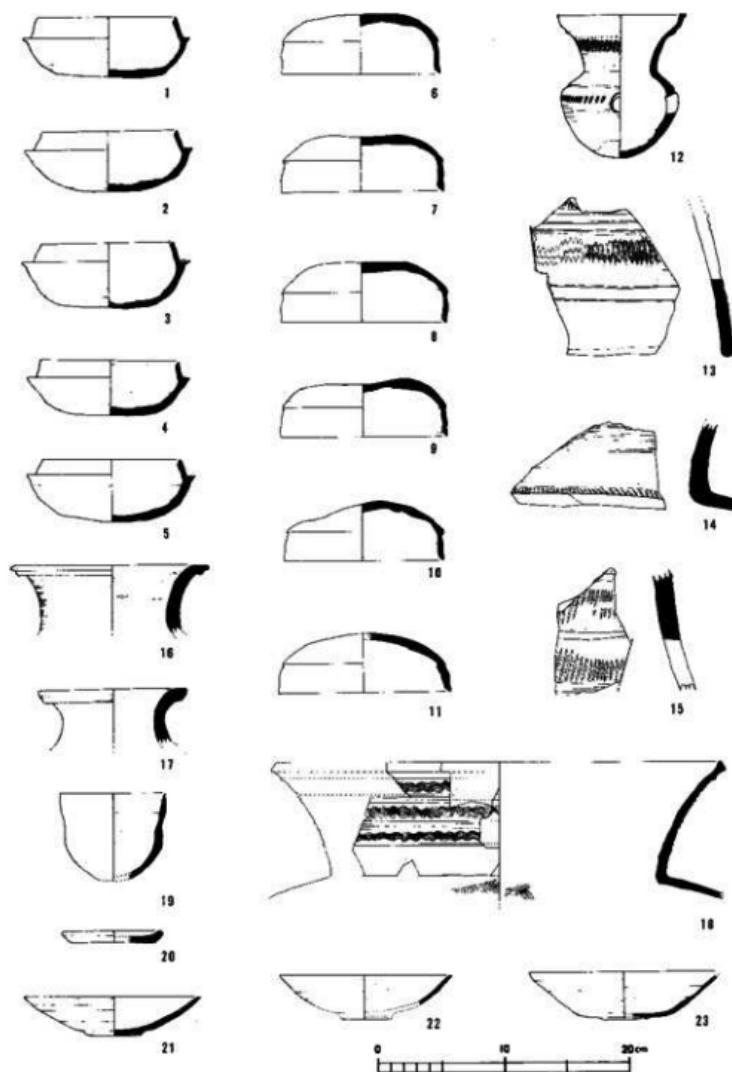
### 1) 須恵器

本調査において出土した須恵器は石室内から蓋1点・甕片数点が出土し、石室西側から杯5点、蓋5点、甕1点が二次的(戦後開墾時)に埋められていた。またその外に石室北面に検出された溝(SD-1)から大型甕、器台片の出土も合わせて見られ、計18個体の須恵器が出土し、これらは一括遺物として考えられる。

出土須恵器はすべて焼成良好であり、このうち杯(No.1~5)は受部が短く、受部からの口縁端までのたちあがりも比較的高くなっている。蓋A(6~10)は天井部が扁平になるものと丸味かかるものが見られる。またこれら蓋Aは杯とセットをなすもので多く共通点が認められ両者とも底部及び天井部のヘラ削り範囲は比較的広く3分の2範囲が認められ調整も丁寧である。なお石室内出土の蓋Bは蓋Aと多く共通点が見られ大差ないものとして考えられる。

甕(18)は頸部に櫛描き波状文を施し体部の張り出し部分に列点文様を施す。器形的には口頸部が外反し口縁端部をヘラにより平らに仕上げている。

大型甕(18)は口頸部のみであるが大形になり外反した口頸部に外面に一条ないし二条の凸帯によりX曲した中に櫛描き波状文を施している。



第21図 須恵器実測図（土師器19・20、瓦器21～23）

## 2) 塚 輪 (24~34)

本調査において出土を見た埴輪片の大半は主体部北面の溝 (SD-1) からのものであつたが1か所のみ明らかに溝南面肩部から円筒埴輪の基底片が原位置より出土をしている。

また出土を見た埴輪はすべて破片であったがそのうち完形復原5点(円筒3, 朝顔形2)で、部分復原6点(円筒4, 朝顔形2)であった。

### a. 円筒埴輪 (24~27)

器高は35cm~36cmで一定し、比較的小型である。器形は基底(直径12cm~14.5cm)から直線的に上広がりになるもので口縁端部(直径26cm~28cm)及び基底端は平らに仕上げている。また胴部外面に粘土紐による断面台形の貼付凸帯二条により区画し、中央部に一方向円形穿孔((直径5cm~6.2cm))が外から施されている。

調整は口縁近くの内面から口縁にかけてヘラ調整後指によるナデ調整が見られる。また外面には突帶の上下に指頭によるナデを施し、その他の部分全体的に布状のものによる縦ナデを施している。

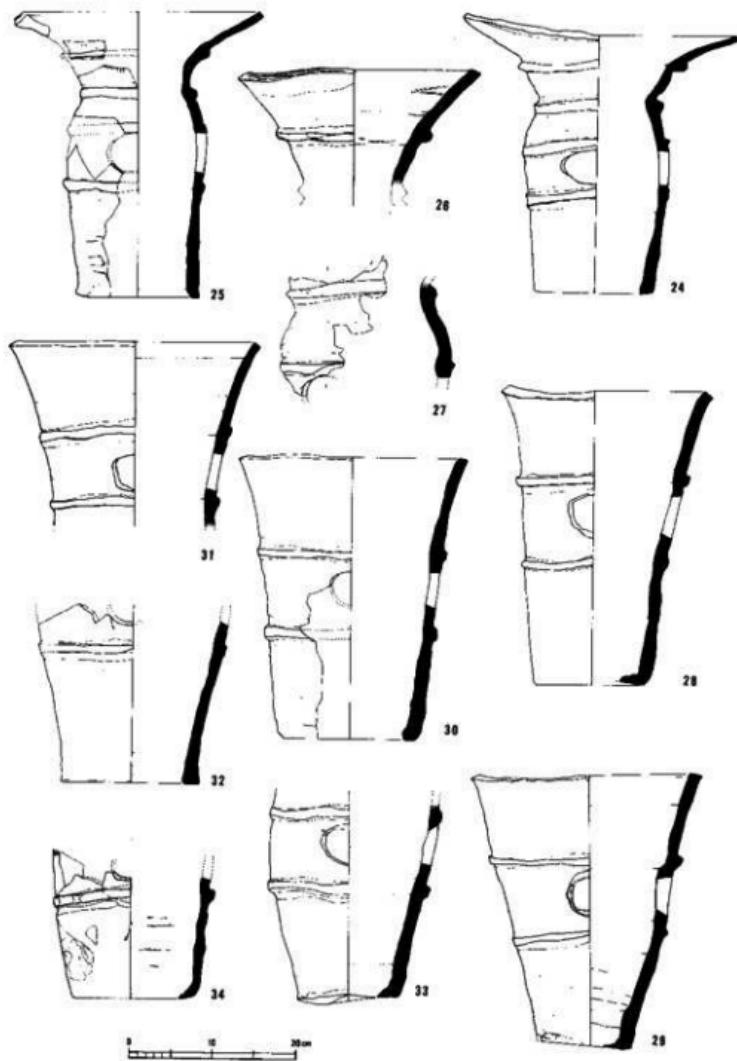
なお焼成は良好で硬質のものが多い。

### b. 朝顔形埴輪 (28~34)

器高は34cm~36cmの小型と言え、器形は基底より胴上部にふくらみをもたせ頸部でいったん内湾してしほって口縁部が花びら状に大きく外反し広がるものと口縁部外反度の広がりがやや少ないものが見られる。

また、粘土紐による断面台形の貼付凸帯が口縁下及び、頸部に各一条と胴部に二条の計四条で区画し、胴部に一方向の横円形又は、円形穿孔(最大径8.5cm)を施している。

調整は口縁内面に丁寧なヨコナデを施し、胴上から基底にかけて荒い縦グシ調整を施している。焼成は良好、硬質で須恵質を思わせるものも見られる。



第22図 墳輪実測図

出土装身具類観察表

(単位: mm・g)

No.	種類	高さ	底径	孔径	重量	色調	材質	備考
1	管玉	21.2	8.6	1.96	1.7	3.11	暗いみどり	碧石 黒に近い色
2	"	20.2	9.1	2.45	0.9	3.05	濃いみどり	"
3	"	16.4	7.15	1.85	1.0	1.61	"	"
4	"	20.1	8.05	1.7	0.6	2.57	"	斜めにきみどり色の輪模様
5	"	18.7	8.15	1.45	1.1	2.35	"	"
6	"	16.1	6.7	1.80	0.8	1.40	"	下部に一部きみどりがある
7	"	17.8	5.25	2.0	0.7	0.86	"	上部に少しきみどりがある
8	"	21.2	7.80	2.75	0.5	2.45	"	"
9	"	17.0	6.0	1.8	0.6	1.10	"	濃いめの緑模様がある
10	算盤玉	10.1	11.5	3.2	0.9	1.6	半透明 水晶	孔の内部に朱が残存
11	"	8.1	10.25	3.0	0.7	1.2	"	朱の附着なし
12	"	9.55	11.2	2.9	1.0	1.56	"	孔の内部に朱が残存
13	"	9.70	11.6	2.85	1.35	1.6	"	"
14	"	11.3	13.35	2.75	1.05	2.5	"	"
15	"	11.9	14.05	2.90	0.75	2.8	"	下部中央一部欠失、朱残存
16	"	9.40	11.1	3.30	1.05	1.51	"	朱の付着なし
17	"	8.85	11.9	2.9	0.9	1.52	"	孔内部に朱が残存
18	"	9.0	11.45	2.7	1.15	1.59	"	孔1/2下部に朱が残存
19	"	10.2	12.7	2.65	0.9	1.98	"	朱が残存
20	"	9.75	11.9	3.10	0.75	1.61	"	下部孔一部欠失、朱残存
21	"	9.50	11.5	2.70	0.95	1.62	"	朱が残存
22	"	8.50	10.2	2.40	0.80	1.07	"	朱の付着なし
23	"	8.0	10.0	2.50	1.1	1.0	"	朱が残存
24	"	8.40	10.1	2.75	1.0	1.1	"	一部朱が残存
25	"	8.75	9.95	2.80	1.20	1.1	"	朱が残存
26	"	8.45	10.4	2.60	1.70	1.09	"	朱の付着なし
27	"	8.40	10.2	2.90	0.8	0.9	"	朱が残存
28	丸玉	5.8	7.15	2.15	2.1	0.38	薄い青色 ガラス	
29	"	5.45	6.80	2.0	1.7	0.32	"	光沢がある
30	"	5.30	7.0	1.8	1.6	0.30	"	"
31	"	5.70	7.65	1.7	1.7	0.45	"	"
32	"	5.10	7.90	2.1	1.95	0.52	紫紺色	白形に近い
33	"	5.0	8.0	7.2	2.4	2.1	0.42	"
34	"	6.25	7.30	1.20	1.0	0.58	濃い緑色	"
35	"	7.15	7.20	1.40	1.45	0.51	"	"
36	"	6.20	7.35	1.30	1.30	0.48	"	"
37	"	5.0	6.6	1.65	1.50	0.40	"	"
38	"	5.7	7.65	1.20	1.15	0.45	"	"
39	"	6.3 (6.1)	7.0	1.35	1.25	0.48	"	"
40	"	6.15	6.90	1.45	1.30	0.41	"	一部欠失
41	"	5.50	7.30	1.60	1.50	0.40	"	"
42	"	5.80	7.55	1.70	1.60	0.45	"	"
43	"	5.0	7.80	7.45	1.40	1.30	0.49	"
44	"	6.6	6.70	1.35	1.35	0.45	紫紺色	"
45	"	6.10	7.30	1.70	1.55	0.51	濃い緑色	"
46	"	5.50	7.10	1.75	1.65	0.42	"	"
47	"	4.30(4.25)	8.30	1.55	1.50	0.40	"	"
48	"	6.1	8.6	1.55	1.50	0.7	"	"
49	"	6.0	7.0	1.40	1.25	0.4	"	"
50	"	4.0	7.30	1.55	1.50	0.3	"	"
51	"	6.65	6.0	1.8		0.19	"	"
52	小玉	2.75	4.75	0.8		0.08	薄い青色	"
53	"	2.65	3.85	0.6		0.05	濃い緑色	"

出土須恵器観察表 (P15-第21図)

器 形	土器 番号	形 築 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
杯	1	○たちあがりはやや内傾し、受部からの高さは1.5cmから1.8cmになり、先端はやや丸くおさめ内面に凹線状になるもの(2~4)と後になるもの(1・5)が見られる。 ○受部は短く、水平になるものと外上に延びるものが見られ、先端は比較的鋭い。 ○底部全体にヘラ削りを施し、体部と底部の境はヘラ削りにより明瞭である。 ○ヘラ削りは全体的にシャープさがない。	○底部のヘラ削りは比較的丁寧に削りかねている。 ○口縁及び体部はナデによる調整が見られる。 ○削りの方向は時計まわりが多い。 ○焼成は良好である。	蓋Aとセットをなす。
	1			
	5			
	6	○大井部は平らになるもの(6~9)と丸味があるもの(10・11)になる。 ○大井部のヘラ削り範囲は3分の2範囲が認められ、シャープさはない。	○杯と同じ。 ○焼成は良好である。	
	1	○大井部と口縁部の境界は突出し、明瞭な棱が見られる。 ○この後輪から口縁端までは2.5cm前後が計測される。		
	10	○口縁先端は杯と同じである。 ○口径は後輪部と同じもの(6~8)とやや広くなる(9~11)ものが見られる。		
	11	○Aと形態上の差異はほとんど認められない。 ○大井部と口縁部との境界に見られる棱線の突出はやや少なくない。 ○後輪部より口径が広くなる。		石室内出土
	12	○口頭部は外反した上に段をなし、口縁部はやや内寄状になる。端部上面はヘラにより平らに仕上げている。 ○頭部に櫛引き波状文を施す。 ○体部は肩がよくはり、底部は尖り気味になる。 ○体部の張り出し部分に列点文様を施し、この部分に円形穿孔をする。	○口頭部の内外面にナデ調整を施し、体部下にはカキ目が見られる。 ○焼成は良好である。 ○製作は4工程が考えられる。	
	13	○カキ目調整後に櫛引き波状文を施す。 ○ヘラ削りを二条ずつ区画し、それぞれ三角形透しを施す。	○器表は全体的にカキ目調整が考えられる。 ○内面には丁寧なヨコナデを施す。	○脚部の破片のみ
	15			
盤	16	○頭部は外反し、口縁端部は水平方向にひねり出し、端部上面は平らに仕上げる。 ○端部下面に凸唇がめぐらされる。	○頭部は無文になり、丁寧なナデを施す。	口頭部破片 (石室内出土)
	17			
大 型 盤	18	○口縁端は上下にわざくにびき、後をつくり、その端部に凸唇をめぐらす。 ○口頭部は外反する。 ○またその下に就く口頭部には一条ないし二条の内唇により区画し、中に櫛引き波状文を施す。	○口頭部内面には丁寧なヨコナデを施す。 ○体部内面には同じ円文を残す。	
	19	小型でコップ状に近く丸底になる。頭部がわざくに彎曲し、端部は尖り気味になる。	全体的に薄く作られている。口縁部外側から内面にかけて丁寧なナデを施す。	
土 器 盤 小 皿	20	小型の皿であり、底部は広く、口縁の外傾度は大きくな。	底部に明瞭な糸切りの痕跡を残す。(灯明皿か?)	当古墳とは無関係と考える。
	21	○体部及び口縁部が外上方へ直線的にのびるものとやや内寄するものが見られ、端部は丸くおさめる。	○外側にヨコナデ及び不定方向のナデを施す。	当古墳とは無関係と考える。
瓦 器	21			
	33	○底部には粘土棒による低い高台が付される。	○内面に暗文を施す。(色調は黒褐色)	当古墳とは無関係と考える。 3個体出土 (平安期)

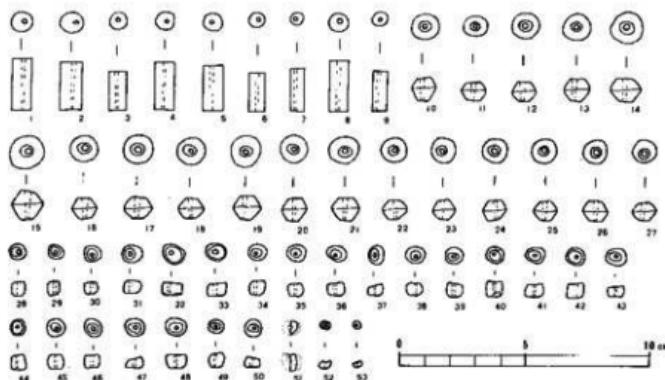
出土鉄器類観察表

(単位: cm)

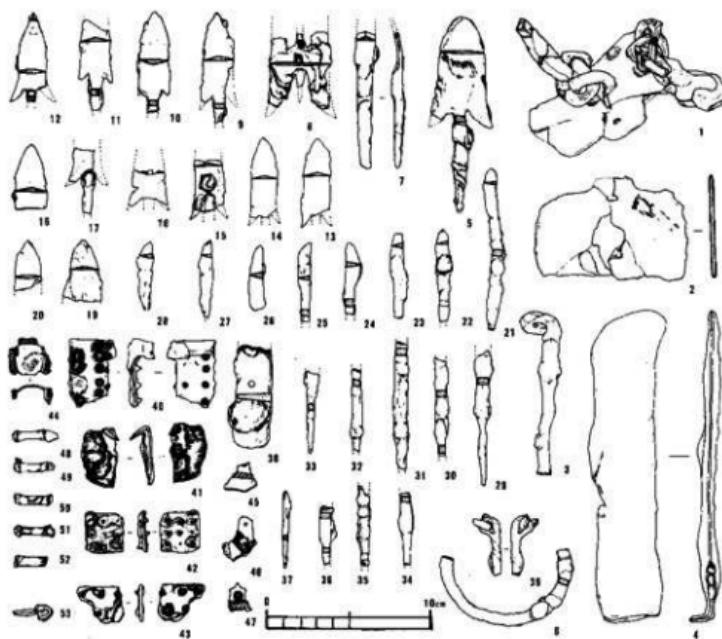
No.	種類	全長	最大幅	最小	残存状態	備考
1	馬具 鋼				完形に近い	鍛造1板引手が計く
2	" 鋼板	9.5	6.3	5.2	"	裏片中央部に突出部あり
3	" 引手	10.0	1.0	0.7	一端に痕状巻	No.1の物に付属か?
4	鍵	19.5	3.7		完形	3つに折接合
5	鉄錐陽挿式平板	15.2	4.0		完形に近い	刀部表面に植物竹筋
6	馬具 素面三連	直径 8.0	0.7		約半分	軸3点あらが接合不可
7	鉤	現状 8.5	刃1.1	柄0.7	刃先欠	柄の長さ6.5
8	鉄錐	" 4.7	3.8	3.5	刃先溝	通し鉄錐か、茎に本質
9	" 挿挿式平板	" 6.9	2.0		茎、柄折一部欠	刃先鋭く尖る
10	" "	" 6.4	2.0	1.8	" "	"
11	" "	" 5.7	2.1	1.8	刃先、茎欠損	刀部は片面凸作り
12	" "	" 5.6	2.1	1.6	茎、柄折一部欠	刃先鋭く尖る
13	" "	" 6.6	1.8	1.6	" "	刀部片面凸作り
14	" "	" 5.0	1.6		現状	茎、柄折一部欠
15	" "	" 4.0	1.6	"	茎、刃先欠損	"
16	" "	" 2.3	2.4	1.9	" "	"
17	" "	" 4.1	1.9	現状 1.2	小片	
18	" 平板	" 4.1	2.0		茎欠損	刀部片面凸作り
19	" "	" 3.8	2.4	1.8	"	"
20	" "	" 2.2	1.6		刃先部	刀部片面レンズ状作り
21	鉄錐冠被式尖板	10.0	0.8		完存	茎被、断面角、片刃
22	" "	" 5.8	0.8	0.6	茎欠	"
23	" "	" 5.3	0.8	0.5	茎、刃先端欠	刀部片月
24	" "	" 5.5	0.9	0.6	茎欠損	" "
25	" "	" 5.0	0.8	0.5	"	" "
26	" "	" 4.1	0.8		刀部のみ	" "
27	" "	" 4.8	0.8		"	" "
28	" "	" 4.2	1.0	0.6	"	" "
29	" "	" 8.4	0.8	0.4	刃部欠損	茎状、断面角、穴物竹筋
30	" "	" 7.1	0.7	0.5	"	茎被、茎、断面方形
31	" "	" 8.1	0.9	0.6	"	茎被、毛茎被角、穴物竹筋
32	" "	" 5.2	0.7	0.5	"	"
33	" "	" 5.2	0.9	0.4	茎	茎断面丸
34	" "	" 4.5	0.9	0.6	茎	茎被、断面角、茎丸
35	" "	" 5.1	0.7	0.4	刃部欠	茎、断面方形
36	" "	" 3.6	0.8	0.5	茎被、茎の一端	茎被、茎尖に方形
37	" "	" 4.9	0.4		茎	細く断面丸
38	直刀	" 6.4	2.3		茎凹	刃斜0.4mm
39	馬具	10.1	1.0	0.7	引手金具	表面にし字に凹織
40	飾帯金具	" 4.2	3.0	2.4	完形近い	笠底8ヶ見られる
41	資金具					表、裏に本質
42	飾帯金具					笠底8ヶ見られる
43	" "					表、裏に本質
44	馬具 芷金具	現状	2.5	2.3	"	笠底8ヶ見られる
45	" "				断片	約1/4残存
46	" "				"	約1/2残存
47	" "				"	
48	鉤	現状 3.3	0.7	0.5	完形	計測不能
49	"	" 2.4			"	"
50	"	" 2.5	0.5		"	"
51	"	" 2.5	0.5		"	"
52	"	" 2.0	0.55		端欠	"
53	資金具	" 2.5			"	"

保存処理データ表

重量 g	乾燥率%	含浸率%
182.7	0.58	3.12
59.85	0.25	2.0
22.2	0.23	4.73
116.8	0.53	3.34
26.45	0.38	1.7
12.48	0	3.0
10.77	0.19	3.62
11.13	0.27	2.33
7.22	0.7	1.24
8.32	0.25	3.48
7.75	0.26	3.48
5.6	0.55	3.21
6.8	0.45	3.38
6.5	0.31	2.61
4.83	0.63	2.27
3.32	0.3	2.4
4.11	0.5	3.16
6.12	0.49	0.81
5.81	0.53	3.27
2.94	0	3.06
11.13	0.18	2.24
5.06	0.6	1.77
5.71	0.36	4.0
5.16	0	1.16
3.93	0	2.03
3.33	0.62	3.9
3.03	0	2.64
3.56	0.57	2.34
8.35	0.36	0.96
6.44	0.79	3.1
11.1	0.27	2.97
4.91	0.85	5.29
3.1	0.65	2.25
3.83	0.26	3.13
3.6	0	2.77
3.35	0	1.5
1.45	0	3.44
29.2	0.78	5.37
3.68	0.78	2.83
9.15	0.23	5.68
6.27	0.82	4.3
5.9	0.89	5.93
3.47	0	2.6
3.28	0	2.44
2.11	0	0.47
1.71	0	0.58
1.2	計測不能	計測不能
1.55	"	"
1.2	"	"
1.25	"	"
1.25	"	"
1.2	"	"
0.8	"	"



第23図 玉類実測図



第24図 鉄器類実測図

## V まとめと若干の考察

当古墳の調査は1982年2月1日から3月にかけて実働50日間で実施したものであり、遺跡名を調査地の字名により茶臼山古墳とした。

本調査古墳は岩子山丘陵南西部中段（海拔52m～60m）のゆるやかな尾根部に築造されたもので頂上部（海拔114m）の群集墳に対しやや隔離された場所に立地している。

次に墳丘及び外部施設であるが先述したように調査地は開墾等の二次的要因により墳丘部もかなり削平されていた。この関係により当墳の盛土は15m範囲で版築等が見られたが墳丘形態は円墳とも方墳とも言いたいものである。

また主体部北側には南北の尾根を切断状（ほぼ直線的）に溝（長さ20m、幅2.2m～2.5m、深さ70cm）を作りおり溝中より多量の埴輪の出土を見ている。この中で溝部南肩面より埴輪原位置出土が見られている。なお検出された溝北面部の遺構検出を計ったがこの時期の相当施設は見られなかった。

主体部は全壇寸前であったが基底石の配置位置により横穴式石室が考えられ石積み及び石材使用法は奥壁中央部の大きい1枚石を縦に据えた以外は割石による横積み中心として築造されていた。また床面施設はかなり荒らされていて、川原石（3cm～6cm）を玄門近くにかけ寄せていた。なお石室構築に先だって斜面地築造を考慮しており船が陸古墳にも見られている貼床が検出された。

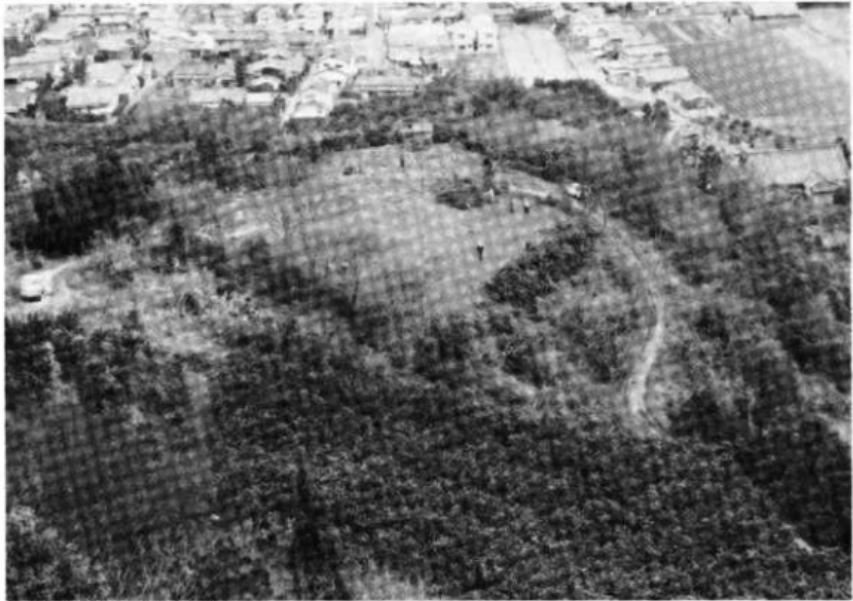
次に出土遺物のうち須恵器は18個体出土し、うち蓋1点及び鏡片以外は石室内から取り出して2次的に埋められていたものであるが一括遺物として考えられる。

これら出土須恵器のうち大型器及び甌は器形及び施文方法とも胸邑のTK23型式のものに類似し、また杯・蓋とも共通点が多く認められる。このうち甌は同一者製作を思わせる程であるが器形的に若干長頸化が見られTK23型式に統くものとして理解するものでTK47型式のものより先行タイプとして考えるものである。

次に埴輪片はかなり多量に出土が見られたがそのうち完全復原5点（円筒3、朝顔形2）で部分復原6点（円筒4、朝顔形2）であった。これら出土埴輪の器高は円筒埴輪が35cm～36cmで朝顔形埴輪は34cm～36cmになり両者とも比較的小形である。このうち円筒埴輪は前述したように胸部に断面台形の貼付凸帯二条を区画し中央に一方向のみ円形穿孔を外から施し、外面を布状のものによって縦ナデ調整したものも見られた。また朝顔形埴輪は断面台形の貼付凸帯が四条施され荒めの縦グシ調整を施している。これら円筒埴輪及び朝顔形埴輪の両者とも鶴が陸古墳の古墳に対し後出のタイプとして考えられ製作上においても比較的粗さが見られる。またこれら埴輪類は前述の須恵器と共に出土したものであり一括遺物として理解できる。これら出土遺物により本墳の築造時期を5世紀末期として考えられるが、なお、

この時期における須恵器及び埴輪の細分類や岩子山古墳群全体の変遷についても今後の追求が必要である。

写 真



調査地全景（北から）



調査地全景



調査地下刈り状況



調査前状況



調査地全景（北から）



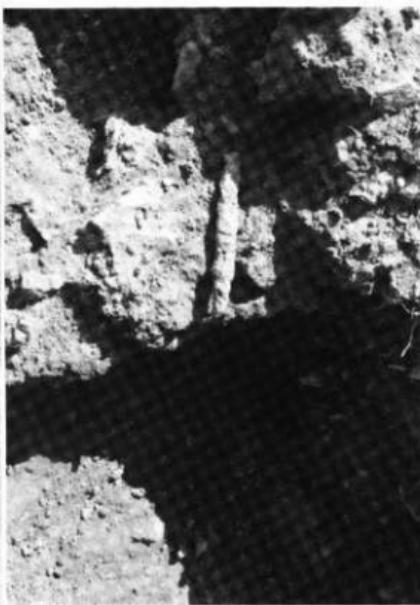
遺構全景（東北から）



石室検出状況 (1)



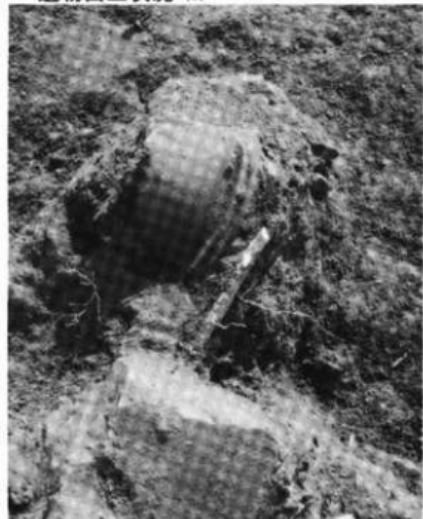
遺物出土状況 (1)



遺物出土状況 (2)



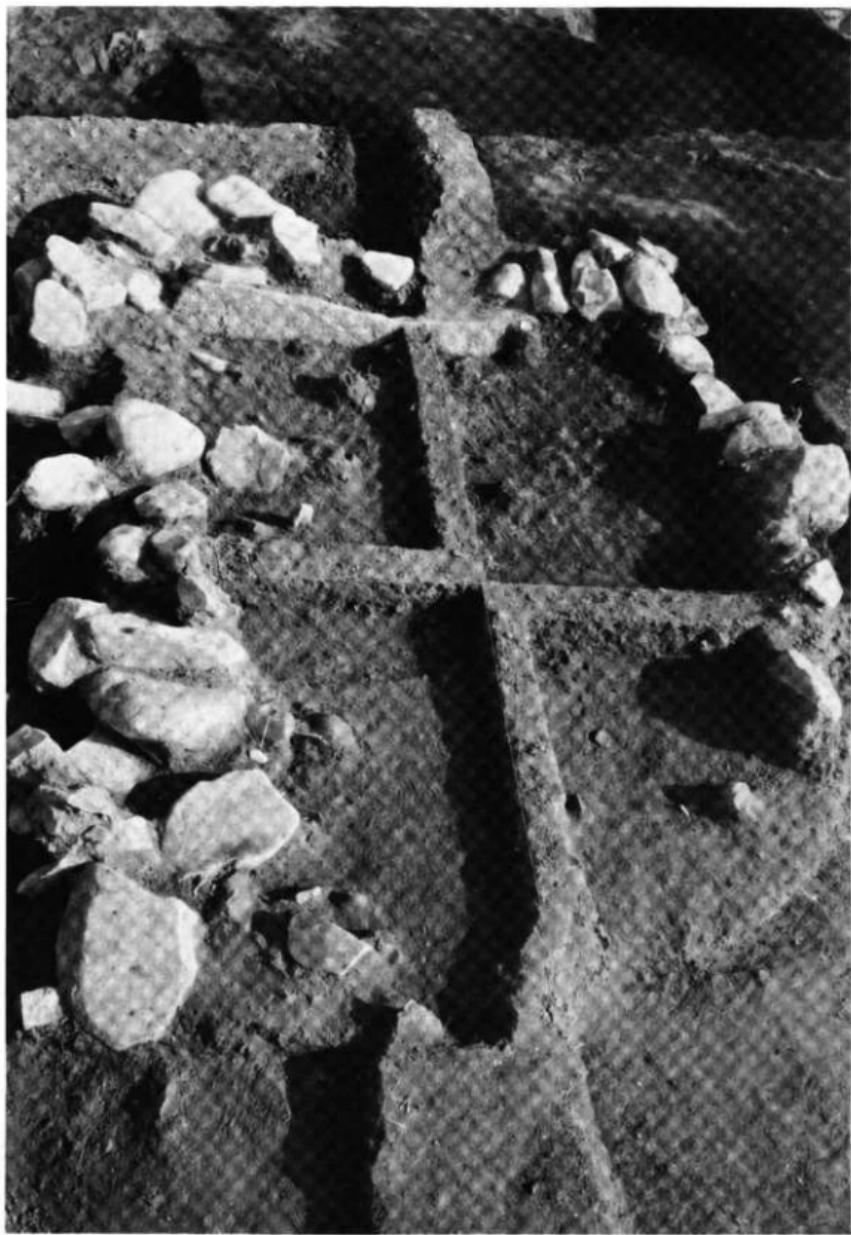
遺物出土狀況 (3)



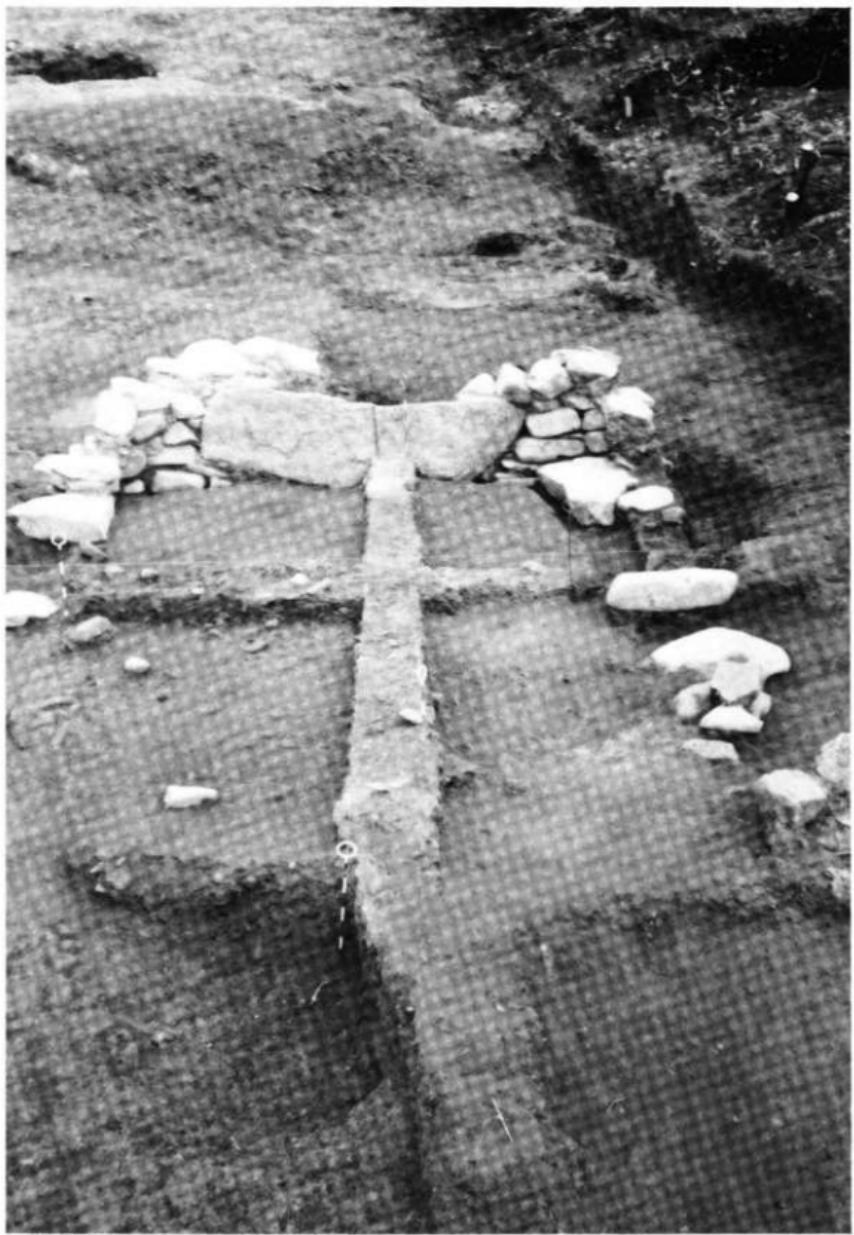
遺物出土狀況 (4)



遺物出土狀況 (5)



石室検出状況 (2)



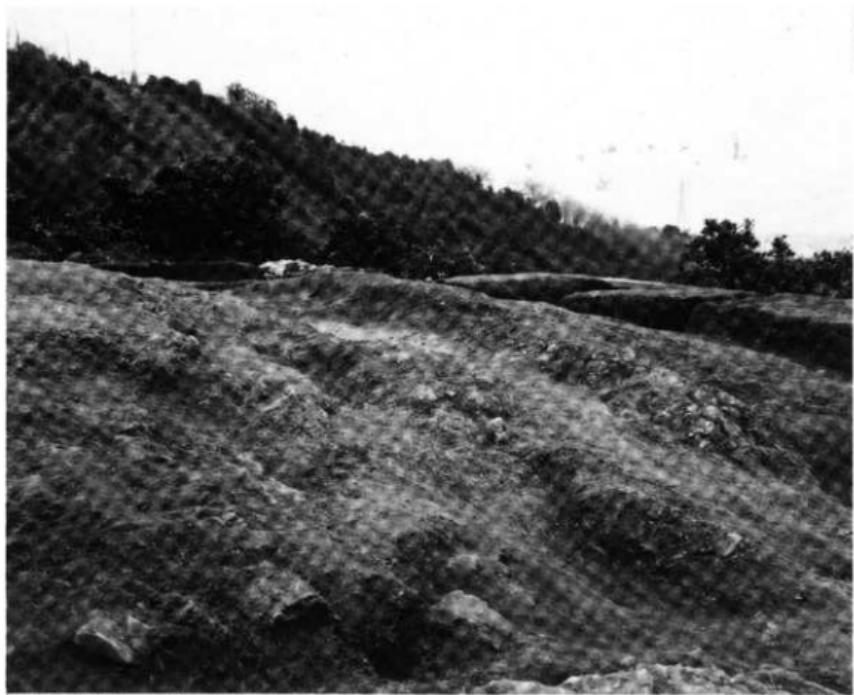
石室全景



石室床面（玉石状况）



版榮確認



溝（SD-1）全景



埴輪原位置の検出



埴輪出土



溝部埴輪出土狀況 (1)



出土狀況 (2)



出土狀況 (3)

溝(SD-1)  
埴輪出土状況(4)



埴輪出土状況(5)

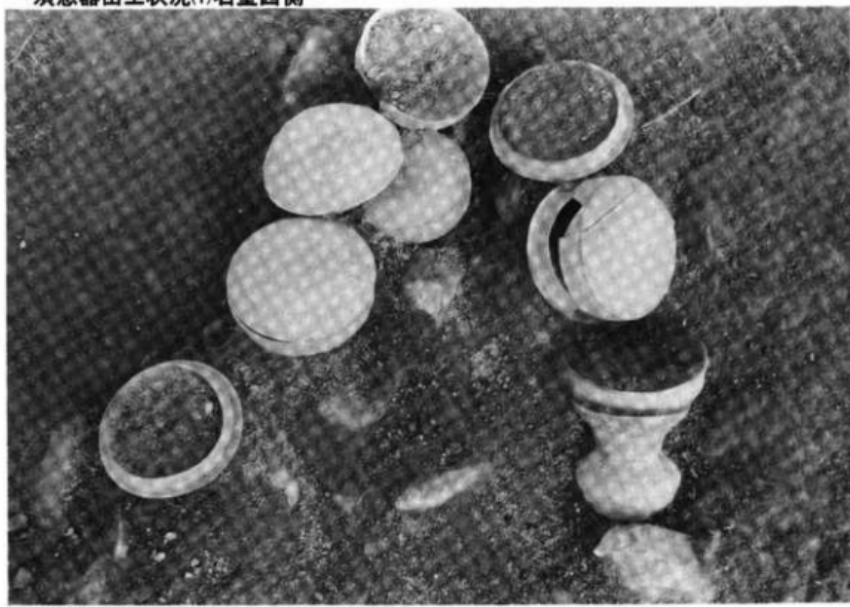


埴輪出土状況(6)

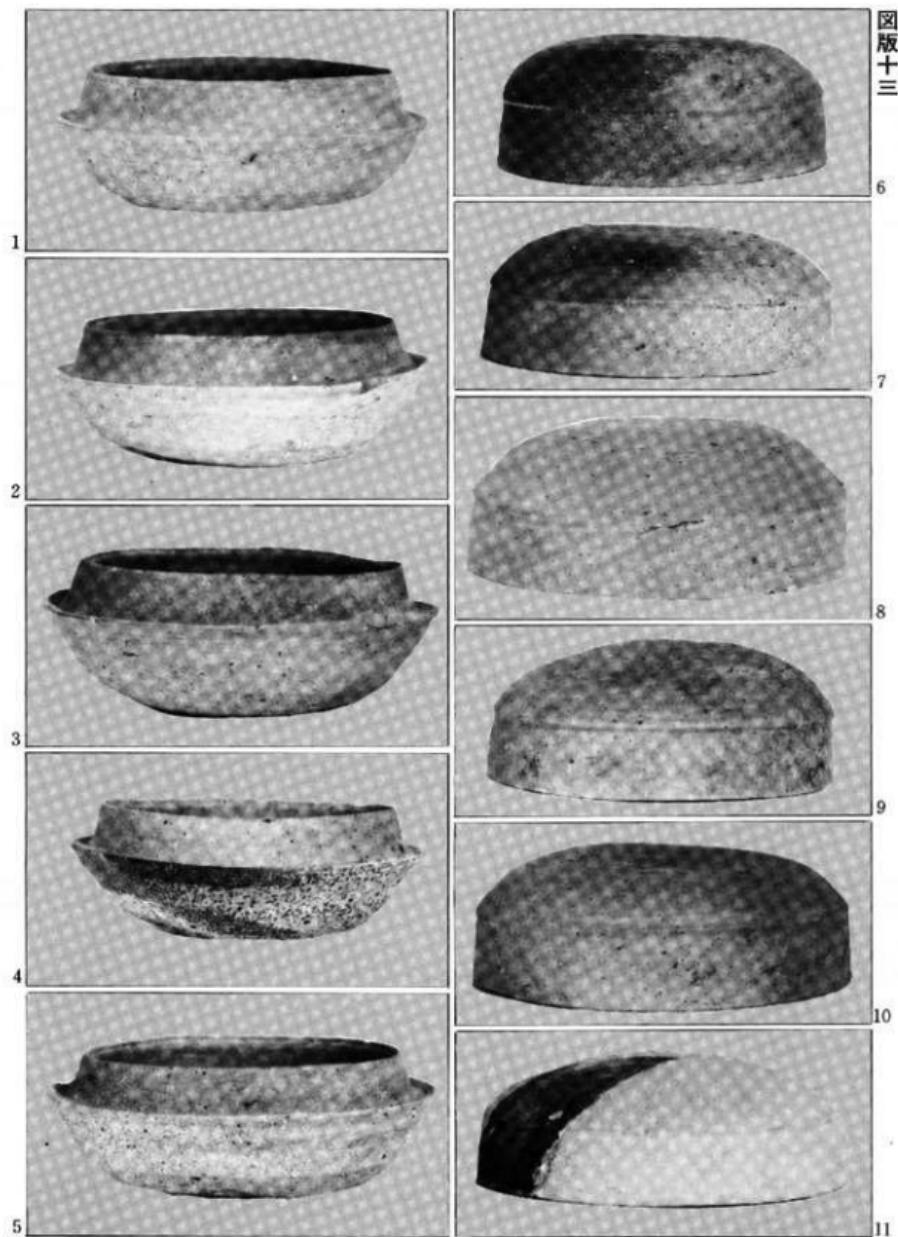




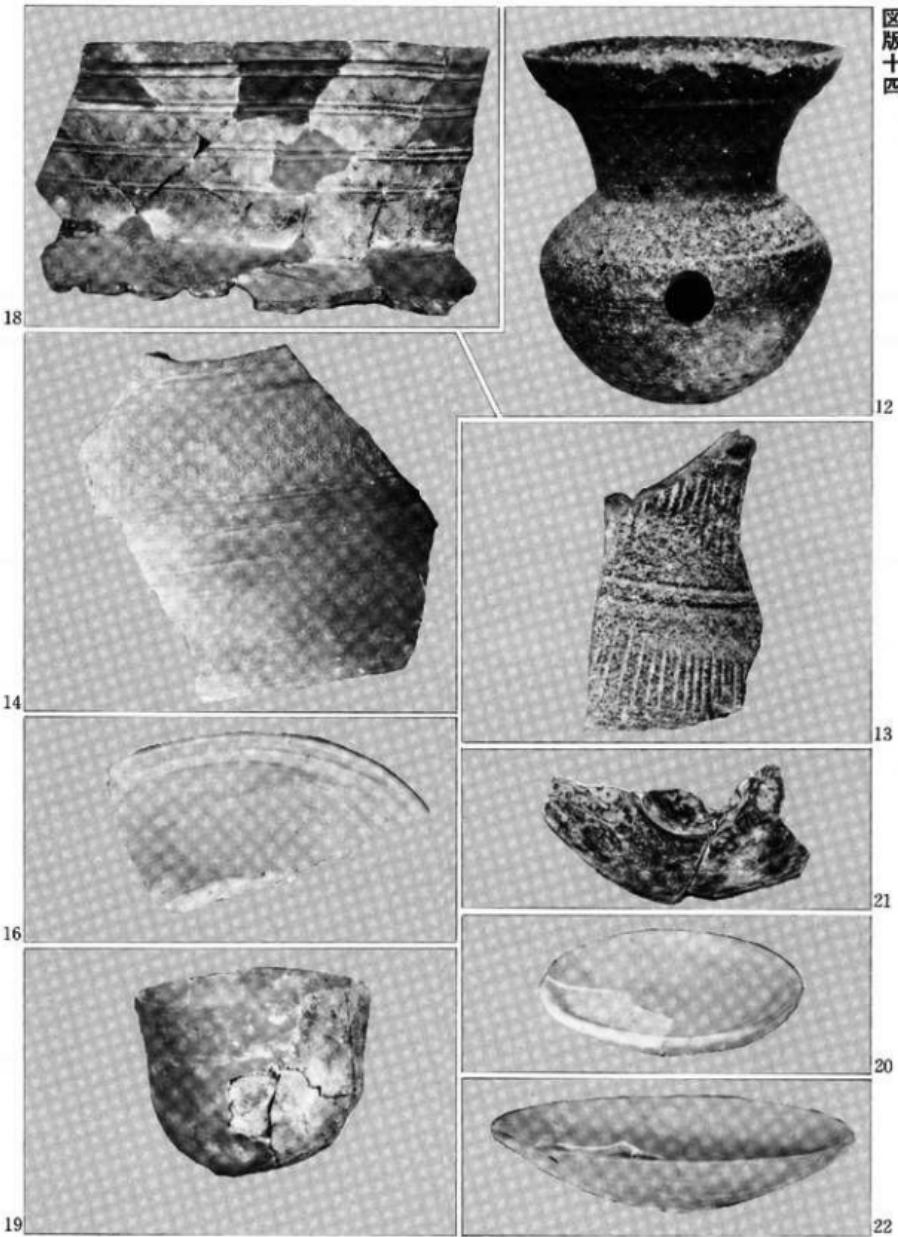
須恵器出土状況(1)石室西側



須恵器出土状況(2)



出土遺物（須恵器）





出土遺物（朝顔形埴輪）



25



27

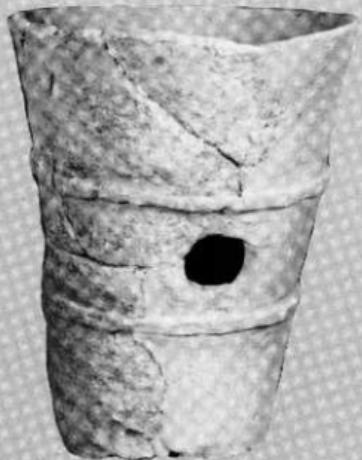
出土遺物（朝顔形埴輪）



26



出土遺物（円筒埴輪）



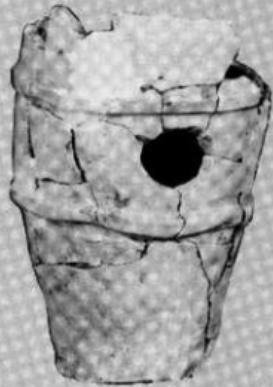
30



28



31



33

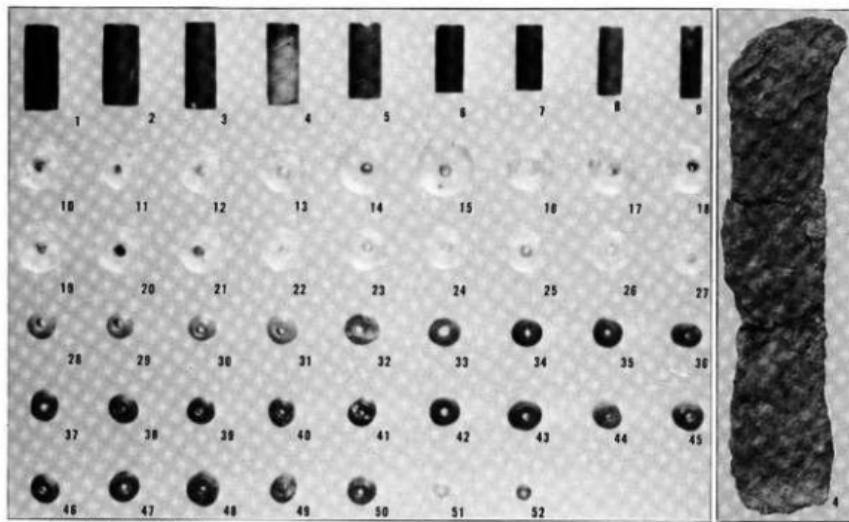


32

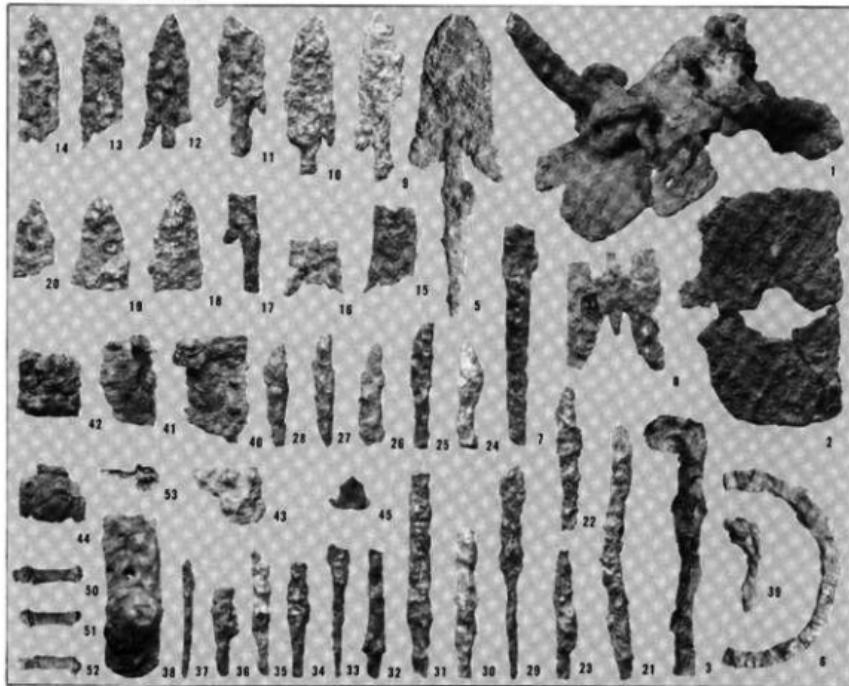


34

出土遺物（円筒埴輪）



出土遺物（玉類）



出土遺物（鐵器類）・保存化学処理済  
(薬品・パラロイド N A D - 10 - 30%)  
(乾燥・60°C, 減圧含浸30mmHg)

## 松山市文化財調査報告書

1 三島神社古墳	昭和47年（絶版）
2 天山桜谷古墳	昭和48年（〃）
3 長隆寺廃寺跡	昭和49年（〃）
4 古照遺跡	〃（〃）
5 笠ノ口遺跡	〃（〃）
6 かいなご・松ヶ谷古墳	昭和50年
7 国道バイパス概報	〃（絶版）
8 岩子山古墳……（人物埴輪）	〃
9 御産所11号墳・忽那山古墳・ 久万ノ台古墳	昭和51年（絶版）
10 古照遺跡II	〃（〃）
11 文京遺跡一弥生土器編年図付	〃（〃）
12 来住廃寺跡（国指定史跡）	昭和54年
13 五郎兵衛谷古墳	〃
14 浮穴・西石井荒神堂・東本II・ III・桑原高井遺跡	昭和56年
15 東山薦が森古墳群	昭和56年

松山市文化財調査報告書 第16集

## 齊院・茶臼山古墳

昭和58年5月31日発行

編集 松山市教育委員会

発行 松山市教育委員会

〒790 松山市二番町4丁目7番地2

TEL (0899) 48-6520

印刷 平和印刷工業株式会社

